

産学協同とこれからの日本経済

生産技術研究奨励会理事

稲葉 清右衛門



わが国が、今日のように経済的、技術的に世界を大きくリードする立場に立つことができましたのは、国民の教育水準や国民の努力によるものでありましようが、とりわけ第2次産業の育成に対する情熱、すなわち、『物をつくる』ことへの執念がもたらしたものであることは間違いのないことです。ところが、これまで、技術立国と物の生産で成功してきたわが国が、今後も引き続いてこの傾向を維持できるかということになると、これは全く予断を許さない状態であるといえましよう。

欧米諸国に対しては、貿易収支ならびにこれに付随する為替レートの問題や、これら諸国のこれからの巻き返し策への対応の問題、発展途上国に対しては、その追い上げへの対応の問題などについて対策を迫られております。これらの問題に対し、これからも国際社会の中でわが国が適正な水準を維持し、これをさらに発展させるためには、一層、慎重な対応が必要であります。

いかなる場合においても、国家経済の基盤は、第2次産業、すなわち、製造業をおいてほかに無いというのが、前々からの私の持論であります。

したがって、今後もこの方向は変えてはならないものと考えますが、ここで、わが国が、協調路線を歩みながら、自国と世界の経済発展に貢献していくためには、どうすればよいのかということについて考えてみたいと思います。

最初の問題、すなわち貿易収支の改善の問題につきましても、私は従来から国際水平分業ということ提唱しており、事実、私の会社では、米国企業のGMやGEと合弁会社を創り、これを実施して成功を収めております。これは、つまり、当事者がそれぞれ得意とする分野を担当してたがいに補完し合い、両国の同種産業を振興させて経済成長に寄与し、貿易収支の均衡に貢献しようとする考え方であります。

一方の、欧米諸国の技術的な巻き返しについては、発展途上国の追い上げに対する対策同様に、わが国は常に技術の高度化でリードを続け、知識集約的な付加価値の高い商品を開発していくことが大切でしょう。ここにも、国際水平分業の考え方の適用が必要となってきます。

このように考えてまいりますと、今後、わが国経済が世界の中で協調しながら健全な発展を続けるために最も必要なことは何かとなると、それは技術開発にほかならないということになります。とくに基礎技術の開発はきわめて重要であり、新技術のライフサイクルが年々短くなっている昨今、いかにこれを効率よくタイムリーに行っていくかということが大切な課題であります。

また、技術は、次第に各種の技術が総合されたシステム技術を指向しております。一企業の枠を超えたものも多くなり、プロジェクトは大型化の傾向が強くなっております。この問題に、今後どのように対処していくかということも、重要な課題の一つであります。

ここで、今後わが国が必要とされる技術開発を進めるための効果的な方策を考えてみますと、その一つは欧米諸国もわが国に対する巻き返しの唯一の方策として推進している企業内教育の充実であり、さらに、これまで必ずしも十分ではなかった産学協同の各種の行為が、これからは一層重要なものとして位置付けされてくるものと思われまます。

(ファナック㈱代表取締役社長)